鶯鳴あのを尾州より関白殿帰洛乃さきこ
鳥とをおほくもてせら進ら進ハ

聖門至

鶯乃あく山鳥鳴をさ尾乃おくなかくしくも要るたの人
お勝し

うかさも河内之お津ゝ鴨の足のした屋ほらぬ

まんぬつよし家

右東國陣道記以詞林意行集校合了

蒲生氏郷紀行

天津正しき二十九年前関白おかいまうちさき
入唐志ゝ御い侍らんとものしたまふに日乃りと
の武士乃こりなくれ供しいんるに陸奥よりも
立侍りけるに白河乃実をおゆるとく
陸奥岩家古もおなし名ところの白河の実いまうこえゆく
こゝのみて出くゆくおとふ小牲乃出にいたりぬいと
さよくなる新川乃さよ柳の見けるといふに堂
尋侍るにられるん趣り乃上人に見しるへせし
柳よといふを守家書よりや新古今に見のへり

清水なりなく橋かけと侍りしをおりいいて
今も海に流れ出るし柳陰もまよひかゝ居たるへせよ
こうちかゝめてもけるほとにこゝハ須磨の原といふ
所なりそれハあまりに人家もなく物さひし
ゝ里つるまゝ所とこゝひつゝ称く
世中に家ハ何をか須磨の原なきもなく家やへぬへさ
かといひくして所過ゝるに佐理乃兼橋につき常
里人の出侍りしにてこゝねといひそれハ世ちしにく
昔人を忘ける人乃むるしく成し為頼こうや
うれ事とかゝるをきてあたれにおりかしぬ事ハ

これや此さの〻兼橋にてこゝにそいまし人のことあり事なる
こゝにてうちわたりつゝゆくに上野をもすさきく伝
法国に入ぬ浅野れたけにそふ里のこゝつをこゝく我ん
におりふ人の事とおりひてゝかゝける
志かのかゝ浅野れ是も何をかふ我のこむねをこゝにとこへハ
とものし侍りふおるし國乃末曽といふ所をもかと
にさひし家なる家ひとろあたはるるといふ
所とこひ侍事ハこてなんこゝへりれ里といふ話にふ
所人なきよしもあらさりそれをおもしろき里
の名なりけるものかなとおりひて

かきりなくこなくもてに来そのちや雲間の流をとゝり此里
程四さくてこの雲ゝる井といふ所より称して
今里称する者の新端乃あ是ハ雲霧もたる井の明りて乃雲
とゝまゝくりや歌も明り程にゝひ立つて四さけ是も
至江の雲にいゝりぬ宴ハ我生雲なり今れハ故江と
なつゝしうたひ今る
おもひきやくの月数定めなき我ゆる江をゝそにゝんとハ
とゝまんつゝ此行りける和らにもちや程なく家に付く
ちるくとゝひし我そ今ハもやんのまゝ此頼以りし夜

右氏卿紀行以加賀美遠清本校合畢

東海の津覚

宗長

白川の罪此にうちましまゝ事とゝもにおもひ
ゝん栄来をゝ通しゝん此軒を半にて
永正六年文月十六日とゝ行ゝめておもひ
半ちぬ其日ハ艸屋の隣家訣茂加賀
安元一折とゝしうハ辞しうゝて発句
風に美よいまゝ明りゝん葛葉代
和うき侍におゝるといふ古言をおもひ出るまゝ
あるへし此程ハ丸子と云山里にそゝしし